

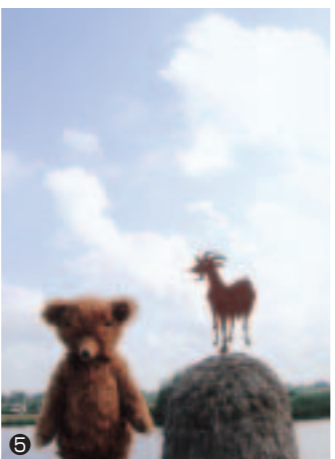
旅するテディベア

連載 第2回 オランダの旅 The Dandelion Press Bear 外間 宏政

風車とチーズを訪ねて、美味しいお酒の元祖ジェネパー！初めてのオランダの旅なのに、何故か懐かしい思い出のような物語が甦って来た。小学生の頃図書館で読んだ、堤防の穴を自分の腕で塞ぎ、オランダの村を洪水から救った少年の話。夏のオランダは優しい光に包まれて、部屋いっぱい光を取り入れるかのように、家には大きな窓がある。大きな窓にはカーテンも引かれず、可愛くディスプレイされたお店のショーウィンドーのようで、道を歩く僕を楽しませてくれた。

まるで博物館のようだった。当時の生活そのままに、キッチンには使いこまれたホーローの水差し、寒い地方独特の箱型のベッド、製粉の作業場と、狭いながらも工夫されていた。小さな窓から差し込む光がフェルメールの絵画のように美しかった。／③風車をバックに記念写真。この羽が風で回り、パンを作るための粉が石うすでひかれる。風車が動くとゴーゴーと力強い音に驚いてしまう。／④風車の脇に使い古しの木靴が並んでいた。(そと、履いてみた。)／⑤運河沿いの風見鶏(山羊)とハイポーズ。のどかな釣人が、ビールを飲みながら日光浴している姿も絵になる場所。／⑥リーカーの風車。アムステルダム郊外に立つ風車、歯医者さんの家族が住んでいるらしい。400年近く前、レンブラントがここに立ってスケッチしていたかと想像すると、わくわくして来た。／⑦⑩⑪⑫アルクマール。金曜日の朝、アムステルダム中央駅からデン・ヘルダー行きのICに乗ってチーズ市に出

① キンデルダイク。郊外の運河沿い、18世紀の風車が並ぶ世界遺産の前で記念撮影。オランダの旅の始まり。／② 風車の中に入ってみると、そこは



掛けた。駅を出て聖ローレンス教会、市庁舎をぬけて計量所へ。小さなこの街がチーズの香りに包まれる。／⑦計量を終え、買い手のトラックへとチーズが運ばれる。／⑧アムステルダムのチーズ専門店にて記念撮影。“さあ、僕は何処でしょう”／⑨国土の4分の1は海拔0m以下。キラキラ光る水面の水草。オランダの画家たちがこの光に魅せられた気持ちがわかるような気がした。／⑩山のように積み重なったチーズの中で!むせるようなチーズの匂いは、チーズ好きにはたまりません。／⑪チーズ市は計量所の広場で開かれる。エダムとゴダの競り市。運川沿いに露天が並び、まるでお祭り騒ぎだ。計量所は14世紀に建てられた礼拝堂がオランダチーズ博物館になっている。チーズやバター製造課程やその道具が展示されている。／⑫重たいチーズを計量所へ二人組で運ぶ。息の合った二人のユニークな動きが観客をわかせる。／⑬チーズとハムのサンドイッチ、なんと美味しかったことか!／⑭オランダ最大の屋内アンティーク・マーケット、デ・ローイエルで見つけたテディベア。マーケットの中に約80のブースと沢山のショーウィンドーが広がっていた。／⑮アムステルダム・スキポール空港で、あまりの可愛さに記念写真を撮った公衆電話。無駄なデザインを楽しんでいる国。／⑯移動はトラムに乗って。回数券に日時を刻印して席に座った。アムスの中心街から郊外へ、変化していく街の景色を観ながらの移動もまた楽

しい。／⑰お土産の木靴の中で。古くからの貿易都市オランダは、コロックの自動販売機から粉ひきの風車まで、新しいもの古いもの両方を気持良く使う喜びが、ひとつになっている国だと感じた。オランダ人は全てにおいて受け入れ、オランダ風にアレンジしてゆくボーダレスの心地よさを知っている。

次回の旅は真夏のスペインです。オランダ(ネーデルランド=低い土地)の運河の風車と、ラ・マンチャ(乾いた大地)地方の丘に建つ風車とを比べてみて下さい。

プロフィール

The Dandelion Press Bear 外間宏政(ほかまひろまさ)
1996年ファーストベア制作
たんぽぽの綿毛に乗って世界中にテディベアの心が広がりますように。

ホームページアドレス ● <http://tdpb-hokama-h.com>

PRESENT オランダのお土産「木靴のキーホルダー」を1名様に。
(詳しくはP.58のTeddy Topicsをご覧ください。)